



申10号 現場第一の姿勢で組合員・社員の努力に報い、モチベーションと生活の維持・向上の実現を求める年末手当に関する緊急再申し入れ

その1

東労組が交渉で訴えた事

- 第3回交渉以降、JR東労組に寄せられた組合員・社員の声

8728件

- アンケート結果

「不満95.6%、満足1%」

受け止めるが、**会社回答**

再考せず

(会社)納得しているという声が

相当数ある

**アンケートでは満足は1%だ!!
それは社員の本音なのか!!**



組合の主な主張

- 会社として、多くは納得しているという受け止めだということ踏まえると、労働組合としての議論の場がより重要だと認識した。労働組合として現場目線を第一として議論して来た。経営を考えるならば、現場第一の姿勢を取るべきだ。
- 回答に対して、今まで以上の反響があった。モチベーションが下がって、仕事のやる気もなくなったという声が届いている。これを会社は一部というが、社員の現実だと受け止めるべきだ。
- 経営側と現場の認識の違いや溝が危機的な状況だと認識せざるを得ない。
- 社員数減の中、業績が大幅回復していることは一致してきた。業務は効率的になっていないが、出面が減り、その中で一人何役もできる力をつけて、過去最高の働き度となっている。それに対して、受け止めたと回答するが、コロナ前の水準を持ち出されたら現場はたまらない。それを客観的・多角的に見たと言われたら、職場は「冷たい」という気持ちになる。ここの認識が大きく乖離している。
- 組合員・社員の努力に報いていない、労っていない!
- 過去最高の働き度、物価上昇に賃金が追いついていない。それに加え、コロナ禍を乗り越え、好調な業績をつくり、見通しも明るい状況である。だからこそ3.7ヶ月を求めてきた。改めて再考を求める。



会社の主な主張

- 現場第一の姿勢というのは変わらない。
- 寄せられた声はしっかりと受け止めることに変わりはない。今回の回答にも反映している。
- この間社員の皆さまには様々な施策にチャレンジいただいていることには感謝を申し上げる。様々な要素を勘案して、検討を重ねた結果、踏み込んだ回答であり、最終回答である。



今後については、代表者会議で議論し判断します